

SVA 研修レポート

第三国定住における難民の要望

2008.5.12. 早稲田大学国際教養学部3年

川端 雪乃

目次

はじめに

第 1 章 第三国定住

- 1-1. 第三国定住の背景
- 1-2. メラキャンプについて
- 1-3. 第三国定住のプロセスと関連団体

第 2 章 難民へのインタビュー

- 2-1. 調査対象
- 2-2. インタビューの結果
- 2-3. 難民の要望

第 3 章 よりよい第三国定住のために

- 3-1. 日本への提言
- 3-2. 再定住プロセスに関わる機関への提言
- 3-3. SVA への提言

おわりに

参考文献

< テーマ >

「第三国定住における難民の要望」

再定住プログラムや受入国に対する難民の期待・要望を基に、日本や関連団体にできることを提言する。

< 調査期間・研修場所 >

2008 年 2 月 25 日～3 月 21 日 タイ・ターク県・メーソット

< 調査方法 >

1. 難民キャンプの居住者に第三国定住に関する意識調査を行う
2. IOM の Cultural Orientation を見学
3. IOM の Daryl にインタビュー
4. OPE の Rod にインタビュー
5. UNHCR の税田さんにインタビュー
6. IOM の Processing Centre を見学

はじめに

2007 年秋、日本政府が難民の第三国定住受け入れを検討中という記事が新聞に掲載された。現在、日本の出入国管理及び難民認定法では国内に自力で逃れてきた難民のみ難民申請ができる。検討中の第三国定住プログラムが始まれば、難民キャンプにいる難民も申請できるようになる。審査も現地で行われるため、日本に自力で来ることが不可能な難民に再定住の機会を提供できる。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）と日本政府の会合、グテーレス高等弁務官の訪日など、アジア初の再定住受入国として期待が持たれている。しかし、具体的な受け入れ条件や人数などはまだ決まっておらず各省庁が連携して審議を進めており、受け入れ開始まで数年かかるようだ。

現在、日本における難民申請者・認定者数ともにビルマ難民¹が最も多く、再定住プログラムが始まった場合、ビルマ難民キャンプの居住者が主な対象になるだろう。しかし、日本の難民認定者数は他先進国に比べ非常に少なく、難民に対する支援制度や社会保障が整っていない。そこで、研修テーマを「第三国定住における難民の要望」に設定し、難民の再定住を成功させるために日本や関連団体に何が出来るのか提言を試みた。このレポート

¹ ミャンマーから逃れてきた難民。「ミャンマー」は現在の軍事政権がつけた国名である。キャンプに住むカレンの人々の気持ちを尊重し、このレポートでは「ビルマ」を使いたいと思う。

では、研修中に学んだ再定住プログラムの概要、難民へのインタビュー結果と分析、結果を元にした提言を報告したいと思う。

第 1 章 第三国定住

1-1. 第三国定住の背景

難民問題の解決には 本国への帰還、 一時庇護国（難民が逃げ込んだ国）への定住、 第三国定住の 3 つの方法がある。ここではタイ・ビルマの国境沿いにあるビルマ難民キャンプの場合に絞って説明する。タイに最初のビルマ難民キャンプができたのは 1984 年、現在は南北に 9 つのキャンプがある。2008 年 1 月現在、カレン族²を中心に約 14 万人の人々が暮らしている³。もう 20 年以上キャンプが存続しており、キャンプで生まれ育った人も少なくない。

本国への帰還

ビルマが民主化する目途は立たず、民主化しても少数民族であるカレン族は差別を受ける恐れがある。現在本国への帰還は不可能に近い。

一時庇護国（タイ）への定住

タイ政府は難民条約を批准しておらず、あくまでビルマ難民は不法滞在者とされている。タイ政府は難民に対し、キャンプ以外の場所への居住、タイ社会での労働を認めていない。タイ社会に難民が受け入れられる可能性は今のところ低い。

第三国定住

上記二つの方法が不可能な場合、最後の手段が第三国定住である。長期化するキャンプ生活やキャンプ人口の増大にともない、2005 年から再定住プログラムが始まった。受入国は現在 10 カ国（アメリカ、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、イギリス、ノルウェー、フィンランド、スウェーデン、オランダ、デンマーク）。アメリカを中心にこれまで約 3 万人の人々が受入国へ出発した。

1-2. メラキャンプについて

今回インタビュー調査を行ったメラキャンプは、タイ北部の町メーソットから車で 1 時

² タイ・ビルマの国境地帯に住む山岳民族の一つ。キャンプにいるカレンの人々の多くは、ミャンマー軍事政権による迫害から逃れてきた。

³ Thai Burma Border Consortium(TBBC) feeding figure (2008 年 1 月 31 日付)

間弱の場所にある。2005 年に第三国定住プログラムが始まり、アメリカ、オーストラリアを中心に 2007 年は 9000 人近くが第三国へ出発した⁴。現在まで大規模かつ継続して再定住受け入れを行っているのはアメリカだけである。メラキャンプは 9 つあるキャンプの内最大規模で、UNHCR の情報では 2008 年 1 月現在、男女各 1 万 9000 人程度、計 3 万 8000 人程の人々が生活している。しかし、UNHCR の人口調査に含まれるのは難民として登録された人だけだ。ID 番号を持たない住民の数を合わせると、人口は 4 万人以上になる⁵。住民の 97% はカレン族、ビルマ族が 2%、その他の民族が 1% を占める。宗教は、仏教、キリスト教、イスラム教の 3 つが共存している。仏教徒とキリスト教徒の割合はそれぞれ 40% 前後、残りの 15% をムスリム（主にビルマ族）が占める⁶。

1-3. 第三国定住のプロセスと関連団体

第三国定住のプロセスにはいくつかの段階があり、それぞれ関わる機関・団体が異なる。インタビューで聞いた話や資料を基に、申請、選考・面接、受け入れ決定後の準備、出発の 4 つに分けて説明する。また、インタビューした団体の関係上、ここで紹介するのはアメリカ再定住のプロセスである。

申請

第三国定住を希望する難民は、まず UNHCR の事務所 (Field Station) に申請に行かなければならない。メラキャンプには 3 箇所設置され、毎週金曜に登録会が行われる。難民は、“Registration of Resettlement Interest Form (RRF)” という申請書に、自分の ID 番号、日付、名前、指紋、一緒に申請する家族の人数を記入する。RRF は英語で書かれているため、カレン語・ビルマ語の対訳を付けたほうがよいのではないかと感じた。

再定住の申請をする際、UNHCR の ID 番号は必須である。しかし、最後に大規模な登録が行われたのは 2005 年で、それ以降キャンプに来た人々は “New Arrivals” と呼ばれる。ID 番号を持たない彼らは UNHCR から物資支援を受けることができず、再定住の申請もできない。難民登録にはタイ政府の許可が必要で、UNHCR を含む Tak Provincial Admission Board (PAB) が登録を担当する。2007 年から PAB は登録を休止しているため、New Arrivals は増え続けている。また、2005 年の登録時、キャンプ外で違法な出稼ぎをしていたため登録できなかった難民がいる。そのため家族で再定住を申請する際、一人だけ申請できないというケースが 600 件ほどあり、現在問題となっている。

ID 番号を持たない難民たちは登録を待ち望んでいるが、UNHCR メーソット事務所長、税田さんの話によると、PAB の問題点は誰でも登録してしまうことらしい。ウンピラムキ

⁴ “Camp Profile Mae La”, United Nations High Commissioner for Refugees, Field Office in Mae Sot (2007 年 12 月付)

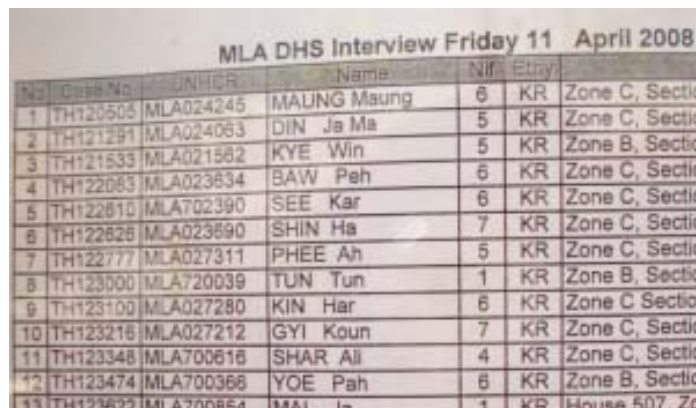
⁵ TBBC feeding figure

⁶ “Camp Profile Mae La”

キャンプを例に挙げると、全人口のうち戦禍から逃れてきた人は 20%、人権侵害を受けた、またはその恐れがある人は 50%、残りの 30%は再定住目的だという。メラキャンプでインタビューした際も、ビルマよりも教育環境が整っているから難民キャンプに来た、と話す住民が数人いた。UNHCR はタイ政府に対し、難民の資格⁷の有無を十分に審査するよう Pre-Screening を提唱している。

選考・面接

UNHCR への申請が受理されると、International Rescue Committee (IRC) という機関に申請者の情報が送られる。IRC 内にある Overseas Processing Entity(OPE)がキャンプ内で最初の面接を行う。IRC はアメリカを拠点に活動する難民のための団体であり、OPE はアメリカに再定住を希望する難民の応募手続きをサポートしている。OPE により、キャンプ内の掲示板に面接日と応募者の ID 番号、名前などが貼り出される(写真 1)。



No.	Date No.	UNHCR	Name	Nif	Entry	
1	TH120505	MLA024245	MAUNG Maung	6	KR	Zone C, Sectio
2	TH121291	MLA024063	DIN Ja Ma	5	KR	Zone C, Sectio
3	TH121533	MLA021562	KYE Win	5	KR	Zone B, Sectio
4	TH122083	MLA023634	SAW Peh	6	KR	Zone C, Sectio
5	TH122610	MLA702390	SEE Kar	6	KR	Zone C, Sectio
6	TH122626	MLA023690	SHIN Ha	7	KR	Zone C, Sectio
7	TH122777	MLA027311	PHEE Ah	5	KR	Zone C, Sectio
8	TH123000	MLA720039	TUN Tun	1	KR	Zone B, Sectio
9	TH123100	MLA027280	KIN Har	6	KR	Zone C, Sectio
10	TH123216	MLA027212	GYI Koun	7	KR	Zone C, Sectio
11	TH123348	MLA700616	SHAR Ali	4	KR	Zone C, Sectio
12	TH123474	MLA700366	YOE Pah	6	KR	Zone B, Sectio
13	TH123622	MLA700854	MAI Ia	1	KR	House 507, Zp

写真 1

さらに、面接の前日、応募者の家に告知の手紙が送られる。OPE の Field Team Leader である Rod に、個人情報保護の観点から掲示板に問題はないか尋ねた。しかし、自分の名前を掲示板に出して欲しくない、という難民からの要望はあまり来ないようだ。

面接は、応募者、面接官、通訳の 3 人で行われる。面接官は様々な国籍・言語を持つ OPE スタッフ、通訳はキャンプに住む難民が担当する。UNHCR からの情報を元に応募者やその家族の話を聞いて書類にまとめる。犯罪歴のある応募者は受け入れられないため、UNHCR の情報⁸とともに、応募者に犯罪歴の有無を確認する。OPE が作成した資料はアメリカの Department of Homeland Security(DHS)に送られる。そして、DHS の役人がキャンプに赴き最終面接を行う。

⁷ 1951 年の「難民の地位に関する条約」では、「人種、宗教、国籍、政治的意見やまたは特定の社会集団に属するなどの理由で、自国にいと迫害を受けるかあるいは迫害を受ける恐れがあるために他国に逃れた」人々と定義されている。近年は政治的迫害のほか、武力紛争や人権侵害から逃れるために国境を越え他国に庇護を求めた人々も含まれるようになった。

「難民とは？」 UNHCR Japan HP

< http://www.unhcr.or.jp/ref_unhcr/refugee/index.html >

⁸ UNHCR の基準では、ビルマ出国後に犯した犯罪は難民のステータスに影響しない。

受け入れ決定後の準備

受け入れが決定すると、International Organization for Migration(IOM)に仕事が引き継がれる。IOM は、移住の問題を専門に扱う団体で、世界各地で活動している。メラキャンプでは出発前の医療検査、受入国に関するオリエンテーション(Cultural Orientation) 出国手続きなどの移送支援を行っている。従来、難民は医療検査のためにキャンプ外の方々へ移動しなければならなかった。また、DHS の役人がキャンプに行く費用や安全性が問題になっていた。そこで、医療検査、DHS による面接を同時にできる Processing Centre が、2008 年 1 月メーソットにオープンした。使われなくなった工場を利用した施設は最大約 1200 人の難民を収容でき、広いグラウンドではスポーツが行われる(写真 2)。



写真 2

平均 4~5 日間の滞在中、食事やマットなどの必需品に加え、英語の授業、ゲーム、映画の上映会など様々なサービスが提供される。シャンティ国際ボランティア会(SVA)が本を提供する図書館もあるが存在を知らない難民が多く、見学したときはほとんど何もない部屋だった。効果的な宣伝方法や家具・本棚の発注などこれから改善していく予定だという。食事は宗教に配慮し、一般用とムスリム用がある。Processing Centre で医療検査と DHS の面接を終えると、キャンプに戻り Cultural Orientation(CO)を受ける。

CO では、受入国の言語、文化、困った時の対処法などを 3~5 日間集中して学ぶ。大人と子供のクラスに分かれ、一クラス最大 25 名で研修する。CO Trainer の Daryl の説明によると、受講者に問いかけ、自分で考え答えを見つける機会を提供する参加型の授業を心がけているという。また、国の基礎知識だけでなく、仕事を得るための面接の練習や“Survival” English⁹など第三国での生活に必要な最低限のスキルをロールプレイ形式で学ぶ。

メラキャンプで、アメリカとオーストラリアの大人クラスを見学することができた。みんなで輪になって座りリラックスした雰囲気、体を使ったゲームが多く受講者は CO を

⁹ “MYANMAR-THAILAND: Cultural orientation gives refugees a glimpse into their new future,” IRIN <<http://www.irinnews.org/Report.aspx?ReportId=77043>>

楽しんでいた(写真3)。椅子とりゲームを通して、競争社会の中で仕事を見つけなければならないと教える様子が印象的だった。このような体を使ったゲームは授業内容をイメージしやすくすると共に、一日5時間近いCOを受ける受講者の眠気防止にもなる。さらに、COの内容が書かれたカレン語・ビルマ語のガイドブックを出国予定者に配布する。同じものが Processing Centre の図書館にも置いてあった。



写真3

COを受講後出国となり、IOMが航空券の手配や出国手続きをする。空港に到着後、アメリカにある10の難民支援団体にサポートが引き継がれる。DHSによる受け入れ許可をもらってから出国まで、大体4~6ヶ月かかる。

第2章 難民へのインタビュー

2-1. 調査対象

難民に対する意識調査では、事前に質問事項を作り、インタビュー形式で聞き取り調査を行った。対象は、メラキャンプに住む難民。人数は以下の通りである。

年齢	11 ~ 18	19 ~ 39	40 以上	合計
男性	6	6	3	15
女性	6	6	3	15
	12	12	6	30

世代・性別ごとに第三国定住に対する意見に違いがあると考えたため、年齢・性別を分け、6つのカテゴリーを作った。メラキャンプ全体の人口比をもとに、各カテゴリーの人数を決めインタビューをした。合計30人の難民にインタビューすることができた。大多数は

カレン族、ほかはムスリムのビルマ族（1人）、カチン族（1人）だった。

2-2. インタビューの結果

全部で 10 個の質問をしたが、現在の状況に関する質問、受入国に関する質問、日本に関する質問、再定住後のアイデンティティに関する質問、の 4 つに分類して考察していく。

現在の状況に関する質問

第三国に再定住したいですか？

	男性	女性	合計
はい	13	12	25
いいえ	2	3	5

第三国定住を希望する人の割合は高いことがわかる。「いいえ」と答えた人の年齢や性別に顕著な偏りは見られなかった。ただ、11~18 歳の男性 6 人全員が再定住を希望したのに対し、11~18 歳の女性 6 人のうち 2 人が再定住を希望しなかった。

再定住したい（したくない）のはなぜですか？

再定住したい理由で最も多かったのは、世代・性別に関係なく「よりよい教育・仕事の機会」（20 人）だった。2 番目に多かった理由は、「自由に外に出る権利」（5 人）で、回答者全員が男性だった。世代別に見ると、中高生（1 人）19~39 歳（3 人）40 代（1 人）、主要労働力の年齢層に集中している。働き盛りの年齢にもかかわらず、キャンプの外で働くことができない環境にストレスを感じているのではないだろうか。一方、女性は自由に外に出られないキャンプの環境に男性ほどストレスを感じていないようだ。この結果から、キャンプの女性は外で働くより、家庭で役割を果たす方が一般的といえるかもしれない。1 日の大半を家の中で家事をして過ごすならば、キャンプの環境にストレスを感じる機会は少ないからだ。

再定住を希望しない女性のうち、2 人は 11~18 歳だった。11~18 歳の男性回答者は全員再定住を希望したことから、この世代の男性は女性より再定住に積極的なのではないだろうか。

受入国に関する質問

どの国に再定住したいですか？（人数が多い順）

年齢	11 ~ 18	19 ~ 39	40 以上	合計
アメリカ	4	5	5	14
オーストラリア	6	3	0	9

ノルウェー	1	2	0	3
スウェーデン	1	0	0	1
わからない		1	1	2

アメリカが最も人気だった。世代別に見ると、40歳以上は全員アメリカと回答している。家族がアメリカにいる、情報が行き届いていないためほかに受入国があることを知らない、などが理由である。一方、若い世代は北欧の受入国の存在もよく知っているようである。また、顕著な偏りが見られたのは女子中高生で、4人中全員がオーストラリアと回答した。この世代の女の子にはオーストラリアが人気なのかもしれない。

なぜその国を希望しますか？

最も多かった理由は、「家族・親戚・友人がいるから」(14人)。2番目に多かった理由は、「教育・仕事の機会に恵まれているから」(7人)。以下の表はその内訳である。

「家族・親戚・友人がいるから」

年齢	11 ~ 18	19 ~ 39	40以上	合計
男性	3	0	2	5
女性	4	3	2	9
	7	3	4	14

「教育・仕事の機会に恵まれているから」

年齢	11 ~ 18	19 ~ 39	40以上	合計
男性	2	2	1	5
女性	2	0	0	2
	4	2	1	7

世代別に見ると、11~18歳は12人中7人、40歳以上は6人中4人が家族・親戚・友人を理由に国を選択している。男女別に見ると、19~39歳の男性で、家族・友人を理由に挙げた人は0人だった。教育・仕事の機会の豊富さが2人、その国への憧れを理由に挙げた人もいた。対照的に、同じ世代の女性は3人が家族・親戚・友人を基準に国を選択し、教育・仕事の機会の豊富さを挙げた人は0人だった。

多くの人によりよい教育・仕事の機会を得るために再定住を希望しているにもかかわらず、子供・老人にとって国を選ぶ際重要なのは、同じ民族での共生のようだ。一方、働き盛りの世代の男女を比較すると、男性は、知り合いの有無より自分が教育・仕事を得られるかどうかを重要視している。独立心が強く、仕事中心に考える傾向があるのではないか。働き盛りの世代の女性は、仕事や教育の機会より家族や友人との生活を重要視しているため、家庭中心に考える傾向があるようだ。メラキャンプでは性別役割分業が浸透し、女性が外で働くことは一般的ではないのかもしれない。

日本に関する質問

日本が第三国定住受け入れを始めたら、日本に再定住したいですか？

男性

年齢	11 ~ 18	19 ~ 39	40 以上	合計
はい	3	5	2	10
いいえ	3	1	1	5

女性

はい	2	2	2	6
いいえ	4	2	0	6
わからない	0	2	1	3

なぜ日本に再定住したい(したくない/わからない)のですか？

再定住したい理由(複数回答可)

	男性	女性	合計
経済の強さ	5	2	7
アジアの国だから	4	2	6

最も多かった理由は「経済の強さ」である。ビルマでは、日本における戦後の経済成長が高く評価されており、多くの高等教育機関で教えられているそう¹⁰。日本への再定住を希望する人は、男性、特に 19~39 歳の世代が多かったため、日本経済に関する教育が影響しているのかもしれない。しかし、この世代の男性に比べ日本への再定住を希望する女性は少なく、経済の強さを理由に挙げた女性は 2 人だった。理由のひとつとして、男女平等な教育の機会が十分でないことが考えられる。また、女性は外で働くことがあまり一般的でないとするれば、自分の活躍の場として日本経済に魅力を感じないかもしれない。そのため、男性の再定住希望者が多かったのではないだろうか。

調査前、日本はビルマと同じアジアの国であり、地理的に近く気候や文化に類似性があるため、再定住希望者は多いのではないかと予想していた。しかし、実際は日本の経済の方が魅力的であるようだ。また、「同じアジアでもカレンと日本の文化はまったく違う」という意見もあった。

再定住したくない/わからない理由

最も多かった理由は、ともに「日本を知らないから」だった。30 人の回答者のうち 8 人が日本を知らなかったが、その内訳を以下の表に示す。

年齢	11 ~ 18	19 ~ 39	40 以上	合計
男性	3	0	0	3

¹⁰ 2008 年 4 月 12 日に行われた、在日ビルマ難民ティンウィンさんの講演より

女性	2	3	0	5
				8

子供は日本をあまり知らないようだ。日本に再定住したくない、と回答した子供が多かったこともうなずける。しかし、19~39歳の女性6人中3人が日本を知らないと回答した。同世代の男性に比べ、日本について学ぶ機会が少なかったのではないか。40歳以上の男女は日本をよく知っていた。第二次世界大戦などの影響が大きいかもしれない。

再定住後のアイデンティティに関する質問

第三国への再定住により、カレン（または自分の民族）としてのアイデンティティの変化は避けられないだろう。新しい環境の中で、彼らが自分たちのアイデンティティとどう向き合っていくつもりなのかを知るために、「アイデンティティ」を「カレンの文化」に置き換えて質問をした。

第三国でもカレン（自分）の文化を守っていきたいですか？

全員がカレン（自分）の文化を守っていきたいと回答した。多くの人が自分の文化を大切だと感じ、カレン（ムスリム、カチン）であることに誇りを持っていた。小学生でも「昔から受け継がれてきたものだから、自分たちが後世に伝えなければカレンの文化がなくなってしまう」と話していた。自分の民族や文化に対する意識、誇りは非常に高いようだ。

第三国で、どのようにカレン（自分）の文化を守るつもりですか？（複数回答可）

一番多かった回答は、「カレンの民族衣装を着る」（17人）、以下、「カレンの文化を周囲の人や子供に紹介する」（12人）、「カレン語で話す」（8人）が続く。各回答者の内訳を以下に示す。

「カレンの民族衣装を着る」

年齢	11 ~ 18	19 ~ 39	40 以上	合計
男性	3	2	2	7
女性	5	3	2	10
	8	5	4	17

「カレンの文化を紹介する」

年齢	11 ~ 18	19 ~ 39	40 以上	合計
男性	2	2	3	7
女性	0	2	3	5
	2	4	6	12

「カレン語で話す」

年齢	11 ~ 18	19 ~ 39	40 以上	合計
男性	1	2	0	3

女性	3	2	0	5
	4	4	0	8

この結果から、彼らがイメージする文化の象徴は民族衣装だといえるかもしれない。子供と 40 歳以上の世代に回答者が多かった。「文化」といわれて即座に回答することは難しいはずであり、悩む回答者も多かった。調査前、「文化」とは何か自分も悩み、言語ではないだろうかと予想を立てた。しかし、カレン語を話すことはできても、読み書きできる人は減少傾向にある。民族衣装は視覚的にわかりやすく、手にとったり、自分で作ったりできる。特に子供たちは、目に見えない文化より目に見える文化の方が確かだと考えているのかもしれない。また、第三国ではその国の言語を使用しなければ生活は難しいため、言語より民族衣装の方が文化を守るのに有効だと考えたのではないか。

カレンの文化を紹介する、と回答した人は年齢が上がるにつれ増えている。子供は家の中やカレンの人々の間でカレンの文化を実践する、と回答する傾向があるのに対し、大人は文化を外に発信したい、と回答する傾向があった。40 歳以上の世代は全員がそう答えている。子供がカレン文化に対して内向的なのは、周囲との違いに恥ずかしさを感じるからかもしれない。第三国定住の影響もあり、若い世代に西洋文化への憧れが広まっているようだ。伝統文化にあまり興味を示さない子供もいるという。だが、今は内向的な子供たちも年齢が上がるに連れ、自分の文化を受入国の人へも伝えよう、という使命感が生まれるのではないかと思う。

カレン語で話す、と回答した 40 歳以上の世代は 0 人だった。彼らにとってカレン語は自分の一部で、カレン語の使用が当たり前になっているのかもしれない。したがって、カレン語を文化として意識していないのではないか。だが、カレン語を読み書きできる若い世代は減少しており、子供たちはビルマ語、英語と平行してカレン語を学んでいる。そのため、カレン語を文化の一つとして客観的に見ることはできないのではないだろうか。

世代、性別に関わらず、普段は第三国の生活に合わせる、と大半の人が回答した。カレンの伝統行事など重要な日に民族衣装を着る、親戚同士集まったときにカレン語を話す、自分がカレン族だという気持ちだけは変わらない、という意見もあった。多くの人が第三国での生活に適応しつつも譲れない部分があり、カレンの文化を守る意思を持っていることがわかった。

再定住後、ビルマが平和になったら帰国したいですか？

「ビルマに戻りたい」と回答したのは 22 人、「戻りたくない」が 6 人、「住んでみないとわからない」が 2 人（男女各 1 名）だった。ビルマに戻りたいと考える男性の方が若干多いようだ。また、40 歳以上の世代は 6 人中 5 人が戻りたい、と回答しており、年齢が下がるにつれ戻りたくない人が増えている。

はい

年齢	11 ~ 18	19 ~ 39	40 以上	合計
男性	5	4	3	12
女性	3	5	2	10
	8	9	5	22

いいえ

年齢	11 ~ 18	19 ~ 39	40 以上	合計
男性	1	1	0	2
女性	2	1	1	4
	3	2	1	6

なぜビルマに帰国したい(したくない)のですか？

帰国したい理由

最も多かった理由は、「自分の母国だから」(16 人)、男女別にみると偏りはないが、世代別にみると 40 歳以上の回答者の割合が高い(5 人中 4 人)。若い世代に比べビルマでの生活が長いため、帰属意識が強いのかもかもしれない。しかし、「ビルマが民主化してもカレンの居場所がなければ意味がない」という意見が多く、ビルマの民主化が難民キャンプの問題をすぐ解決するわけではないことがわかった。二番目が「自分の国やカレンの人々のために働きたい」(5 人)だった。世代間で偏りはなかったが、回答者は全員男性だった。前述の通り、キャンプ内では女性が社会に出て活躍するという考えがあまり受け入れられていないからではないだろうか。

帰国したくない理由

「第三国の教育環境の方が整っている」(3 人)、「帰る場所がない」(1 人)、「第三国の国民になりたい」(1 人)などの理由があった。印象的だったのは、「ビルマで生まれていないから」と回答した 10 代半ばの女の子だ。その子を含め、ビルマに戻りたくないという回答した 3 人の子供は、「ビルマに遊びに行きたいとは思うけれど、住みたいとは思わない」と話していた。キャンプ生活が長期化し、キャンプで生まれ育った子供も少なくない。これからビルマを知らない世代が増え、自分の母国という意識が薄れていくのではないかと感じた。母国を持たない世代にとって、自分のアイデンティティを第三国で守っていくことは、より困難かもしれない。

第 3 章 よりよい第三国定住のために

インタビュー結果からわかった難民の要望をもとに、第三国定住に関わる人々に提言を

したい。ここでは日本政府、再定住プロセスに関わる機関、SVA の 3 つに分ける。

3-1. 日本政府への提言

日本では再定住受け入れプログラムの審議が現在進行中だが、具体的な受け入れ条件はまだ決まっていない。受け入れを始めた場合の提言をしたいと思う。

キャンプ内の支援

第 2 章 2-2 日本に関する質問からわかる通り、キャンプには日本を知らない人が大勢おり、世代・男女間で日本に関する情報に差がある。日本政府は、日本の情報をキャンプの居住者に提供して PR するべきだと思う。経済的な面だけではなく、子供・女性にも魅力を感じてもらえるようさまざまな分野を紹介したほうがよいだろう。また、日本語を知らない人が多く、「日本語が出来ないので不安だ」という人もいた。日本語教師を派遣し、無料で日本語を教えるはどうだろうか。キャンプ内に仕事はあまりなく、多くの人が時間を持て余している。キャンプ内で日本語を学べば再定住に備えることができ、時間を有効に使えると思う。

日本での支援

第 2 章 2-2 現在の状況に関する質問、受入国に関する質問からわかる通り、メラキャンプの居住者が再定住プログラムに望むものは、仕事・教育の機会、家族・友人との共生である。

平等な仕事・教育の機会を得るために、日本語の能力は前提となるだろう。都内にはすでに難民定住支援事業実施施設¹¹という、難民に日本語教育を実施する施設がある。半年または年間集中して日本語教育を受けることができるが、平成 18 年度の受け入れ予定人数は 18 人だった。このような施設を増やし、大人数の受け入れに備える必要がある。さらに、キャンプでの日本語教育と一貫したカリキュラムを作れば、効率よく日本語を学ぶことができるのではないかと。

第 2 章 2-2 日本に関する質問からわかる通り、メラキャンプの場合、同じアジアの国という共通点よりも経済の強さに魅力を感じる男性が多い。彼らの期待に応えるため、仕事の機会を提供していくことが求められる。だが、日本にいる在日ビルマ難民の多くは自分の能力を活かすことが出来ず、安い賃金、弱い立場での労働を強いられている¹²。難民定住支援事業実施施設では無料で職業相談・紹介を受けることができるが、大人数の難民を受け入れるならば職業に特化したハローワークのような機関が必要だろう。難民一人ひ

¹¹ 詳しくは内閣官房 HP「平成 18 年度からの国際救援センターの後継難民定住支援施設及び同施設において実施する難民定住支援プログラムの概要」を参照

¹² 2008 年 4 月 12 日に行われた、在日ビルマ難民ティンウィンさんの講演より

とりの能力を評価し、適切な職を得られるよう支援すべきだと思う。雇用者や職場の人々の理解を促し、差別意識を排除することも重要である。

もうひとつの重要な要素、家族・友人との共生を実現させるためにはコミュニティ形成が不可欠だろう。コミュニティは、文化を保存し継承していく上でも重要だ。国内に大規模なコミュニティを形成することは好ましくないかもしれないが、なるべく集住できる方がよい。しかし、「ビルマ難民」と一括りにすべきではないと思う。キャンプにはカレンを始めさまざまな民族がいることに留意し、それぞれの民族が日本でコミュニティを形成しやすいよう、居住地などに配慮してほしい。

「経済的な魅力」に数は及ばなかったが、欧米の受入国に比べ、日本は人種・文化・気候などが似ている、地理的にも近いためビルマにいる家族と連絡がとりやすい、などの意見を数多く聞いた。今回のインタビュー結果では、同じアジアの国である利点を挙げた人は予想ほど多くなかった。しかし、アジアで初の再定住受入国として日本への期待は大きいと思われる。受入国中アメリカへの再定住希望者が最も多かったが、継続して大規模な受け入れを行っているのはアメリカのみで、ほかに選択肢がないのが現状だ。日本が受け入れを開始すれば、アジアの先進国という選択肢が増える。一刻も早く受け入れ条件を決定し、支援体制を整え、難民受け入れを開始することを望む。

3-3. 再定住プロセスに関わる機関への提言

第1章で紹介した UNHCR、OPE、IOM について、各機関のカレン文化の保存、第三国への適応に対する考え方や取り組みをふまえ、提言をしたいと思う。

UNHCR

文化保存・第三国への適応に対する取り組み

税田さんによると、UNHCR は人道上の支援に特化しているため範囲外だという。個人の意見としては、「カレンの文化を保存するかどうかはカレンの人々自身が決めるべきで、関連団体は補助的な支援に徹するべきだ」と話してくれた。また、再定住先で生計を立てるのに役立つ職業訓練（タイ式マッサージ師など）を提案してくれた。

UNHCR への提言

家族の共生を望む難民が多いことから、第1章で述べた ID 番号の問題を解決してほしいと思う。インタビューの中で、自分の家族は第三国に出発してしまったが、ID 番号がないため自分は申請ができないという人が数人いた。ID 番号がないため家族のうち1人だけ再定住申請ができない場合、審査のうえ ID 番号を付与、もしくは再定住の申請ができるよう受入国政府に呼びかけることはできないだろうか。また、難民の資格を持たない人が難民のステータスを持つことは問題だが、戦禍や迫害から逃れてきて支援を必要とする難民もいるはずである。十分に審査をした上で、ID 番号の登録をするようタイ政府に呼びか

けてほしい。

OPE

文化保存・第三国への適応に対する取り組み

Rod によると、OPE は再定住申請者に面接を行う機関なので、特に取り組みはないという。だが、アメリカ再定住の機会をすべての難民に提供はするが、応募するかどうかは彼らの意思に任せている点で、文化保存に貢献しているのではないだろうか。さらに、OPE は家族や親戚が同じ地域に居住できるよう配慮しているため、彼らのコミュニティ形成に役立っていると考えられる。また、ビルマで抗議運動が起こると面接に来ない難民が多いと話してくれた。本国に帰る希望を持ち続けている人が多いことがわかる。個人の意見としては、できれば難民のビルマ帰還を望んでいるという。

OPE への提言

家族・親戚の共生を促進するために UNHCR や DHS に働きかけ、ID 番号の問題を解決してほしいと思う。また、掲示板に申請者の名前と面接日時などが表記されるが、英語表記ではなくビルマ語・カレン語表記の方がよいのではないだろうか。掲示板を読む人の多くはビルマ語・カレン語を使うのでその方が読みやすいと思う。さらに、面接を受ける申請者の中には英語が読めない人がいるかもしれないからだ。

IOM

文化保存・第三国への適応に対する取り組み

IOM は CO を担当するため、この分野に最も深く関わっている。CO では、自分は何者か、カレン文化とは何か考える機会を提供している、と Daryl は答えてくれた。たとえば、受講者に木を描いてもらうアクティビティがある。自分の人生を木に見立て、過去、現在、将来について考える。根は生い立ち・家族・民族、花はこれまでに達成・獲得したもの、芽はこれからの目標・夢を表す。自分で描いた木の絵を第三国に持って行き、アイデンティティのよりどころとして活用してもらうという。

自分のアイデンティティやカレン文化の定義を明確にした上で、第三国の文化とのバランスの取り方を考える。Daryl が話してくれた「水が入った 3 つのコップ」は比喻を使った説明だ。コップにそれぞれ塩、油、オレンジの果汁を入れる。塩は水に溶けるため同化、油は水と分離するため、第三国の文化を全く受け入れられない人を表す。オレンジジュースは第三国に適応しつつ自分の文化を表現できる人を表す。時と場合によって塩になってもよいし、絶対に譲れない部分では油になっていいと教える。ただし、その境界線は難民一人ひとりに考えてもらうそうだ。

IOM への提言

IOM の CO は、カレンのアイデンティティや再定住後の文化的葛藤に十分に配慮してい

ることがわかる。ただ、CO は一日 5 時間、3 または 5 日間連続で行われるため、受講者の疲労は想像がつく。また、行ったことのない国に移住する準備が 5 日間の研修では十分とは言えない。そこで、再定住の申請中、申請前の人でも CO を受講できるようにしてはどうだろうか。申請中の人には時間をかけて移住の準備をすることができる。再定住に関心があっても受入国についてよく知らない人は CO を通して情報を得ることができるだろう。インタビューした難民の多くは受入国に関する情報が不足し、うわさが原因で不安になっている人もいた。再定住するか正しく判断するためには、正確な情報が不可欠だと考える。

UNHCR、OPE、IOM に共通するのは、難民の意思を尊重し、自発的な行動を望む姿勢である。再定住という選択肢は提供するが、申請するかどうかは難民次第である。CO は自分の文化の定義や再定住先での生活を考える機会を提供するが、IOM が答えを言うことは決してない。価値観は一人ひとり違うからである。タイ・ビルマの国境地帯に暮らすビルマ難民のために、世界中から多くの支援団体が集結している。しかし、各団体が活動に積極的になるあまり、難民の要望より支援が先行してしまうことがあるかもしれない。支援団体ではなく難民の意見による活動が行われているか確認する必要があると思う。自分から活動するのではなく、彼らが支援を必要としたときいつでも協力できる態勢を整えておくことが理想的な支援なのではないだろうか。

3-4. SVA への提言

SVA はタイ・ビルマの国境沿いにある 7 つのキャンプで活動し、キャンプの住民から信頼を得ている。すべての再定住者がカレン文化の保存を望んでいるわけではないかもしれない。しかし、カレン文化の保存を活動の指針とする SVA は、キャンプ内に限らず再定住した人々の文化保存活動も支援できると考える。また、再定住プログラムの過程において、準備段階での支援ができるのではないかと。

織物教室

第 2 章 2-2 再定住後のアイデンティティに関する質問からわかるように、カレンの文化を守る手段として民族衣装が有効だと考える人が多い。SVA の新しい活動として、キャンプ内での織物教室を検討していると聞いた。カレンの織物を作ることができれば、第三国に行っても民族衣装を作ることができる。ぜひ織物教室を実現してほしい。また、織物を作るための材料やカレンの民族衣装、バッグなどをキャンプから第三国に送ることで、第三国での文化保存を支援できるのではないだろうか。

第三国での図書館の建設

カレンの文化を紹介したいと語った人の多くが、文化を紹介する機会を求めていた。また、子供たちにカレン文字を教えたいので、カレン語の絵本があればとても役立つと話し

てくれた人もいた。UNHCR の税田さんも提案していたが、第三国にあるカレンのコミュニティに図書館を建設できないだろうか。受入国の担当機関や再定住者支援団体などと協力し、公民館のような施設を作る。カレン語・ビルマ語の絵本を置き、現在キャンプ内の図書館で行われている伝統文化教室などを開催すれば、カレン文化を紹介する機会を提供することができる。親は絵本を使って子供にカレン文字を教えることができるし、子供たちはキャンプで読んだ絵本をまた読むことができる。何より、みんなが集まり談笑する場を提供することができると思う。

図書館を使った事前学習

再定住にあたり、言語に不安を感じる、受入国の情報がほしいなどの意見を聞いた。キャンプ内は情報が不足し、受入国の情報を多くの人が必要としている。図書館に受入国の文化に関する本や語学学習の本を置いてはどうだろうか。特に、日本が再定住プログラムを始めた場合、日本語学習の本は役立つだろう。また、IOM が行っているような CO を開催できるかもしれない。休館日を利用すれば、図書館で開催することができるだろう。長い間難民キャンプで活動してきた日本の NGO という利点を活かし、日本の再定住プログラムに積極的に関わってほしいと思う。

おわりに

SVA の研修プログラムに応募した動機は、難民キャンプに行きたかったからだった。難民や移民問題に関心があり、元国連難民高等弁務官の緒方貞子さんに憧れを持っていたため、学生のうちに難民キャンプへ行くことが目標だった。日本のビルマ難民については少し知っていたが、タイに難民キャンプがたくさん存在すること、カレンを始めとする少数民族についても何も知らず、タイ語の知識はまったくなかった。

事前にテーマを決めることができず、1 週目はテーマの決定とリサーチペーパー作りをした。難民キャンプの資料を読み、メラキャンプに行き、今最も重要な問題の一つである再定住について調べたいと思った。リサーチペーパーを作る過程で、スタッフにたくさん助言をもらった。2 週目はスタッフに協力してもらいインタビューの練習をし、メラキャンプの居住者に聞き取り調査を始めた。3 週目には、難民キャンプだけでなく、IOM、OPE、UNHCR など再定住のプロセスに関わる機関のスタッフにインタビューする機会をいただいた。4 週目からプレゼンテーションの準備を始め、最終日に発表した。

この研修を通して、タイ・ビルマにカレンを含む多くの少数民族がいることを学んだ。タイでは少数民族への人種差別が続いていることを知った。今までは、軍事政権が終わればビルマ難民の問題は解決すると考えていたが、そんな単純な話ではなかった。マイノリ

ティの人権を保障せずに、ビルマの民主化はありえないと感じた。カレン民主同盟(KNU)はカレンの独立のためにミャンマー軍と戦っている。メラキャンプでインタビュー中、「カレンの国ができなければビルマに帰りたくない」と話してくれた人が数人いた。彼らの表情や声の調子から切実な気持ちが伝わってきた。しかし、世界にはたくさんの少数民族がいる。カレン族もスゴーカーレン、ポーカレンなど細かく分かれているようだ。すべての少数民族が独立し国家を持つとなると際限がないように思え、カレン族の独立について自分の意見がよくわからなくなってしまった。

それでも研修のおかげで、カレンの文化が大好きになった。民族衣装はとても美しく、伝統楽器の演奏を聴く機会もあった。カレンの民話は不遇の人が努力して成功する話が多い。カレン文字は音符のような形で、ビルマ語に似ている。カレン料理の「コノ」(そうめんに入れたスープをかけたもの)はとてもおいしかった。この研修がなければカレンの文化を知る機会はなかったと思うので、本当によかった。

SVA メーソット事務所・東京事務所のスタッフ、インタビューに答えてくれたメラキャンプの方々、他の機関のスタッフなど多くの方の協力を得て調査をさせてもらったことにとっても感謝している。特に、東京でオリエンテーションをしてくれた市川さん、何度も調査の助言をくれたメーソット事務所の小野さん、IOM などの機関と連絡をとってくれた加藤さん、暑い中インタビューに付き合ってくれた通訳のピーイン、ソエドさん、そしてたくさん助けてくれた同じ研修生の鈴木さんに改めて御礼を言いたい。研修で関わった人たちと一緒に作り上げたこのレポートを一人でも多くの人に読んでもらえるよう、いつか英語版も作りたいと思う。メーソット事務所のスタッフはみんな仲がよく、和やかな雰囲気だった。でも仕事のときの切り替えがきちりしているところがすごくいいと思う。研修中は大家族ができたみたいで、とても楽しく過ごすことができた。私はタイ語がまったくできないにも関わらず、英語やジェスチャーを使って話しかけてくれて嬉しかった。今度メーソットに行くときまでにタイ語を勉強して、もっとスタッフと話せるようになりたいと思う。ありがとうございました。

参考文献

「難民とは？」 United Nations High Commissioner for Refugees Japan HP

< http://www.unhcr.or.jp/ref_unhcr/refugee/index.html >

「平成 18 年度からの国際救援センターの後継難民定住支援施設及び同施設において実施する難民定住支援プログラムの概要」内閣官房 HP

< <http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/nanmin/060303program.html> >

「『第三国定住』容認 政府が政策転換へ」毎日新聞（2007 年 11 月 27 日付）

「ミャンマー難民」ワード BOX、西日本新聞

< <http://www.nishinippon.co.jp/wordbox/display/3714/?autonum=3714> >

“Camp Profile Mae La,” UNHCR, Field Office in Mae Sot（2007 年 12 月付）

“ MYANMAR-THAILAND: Cultural orientation gives refugees a glimpse into their new

future, ” IRIN < <http://www.irinnews.org/Report.aspx?ReportId=77043> >

“ Thailand: The mechanics of resettling Burmese refugees, ” ReliefWeb

< <http://www.reliefweb.int/rw/RWB.NSF/db900SID/LRON-7BUH3U?OpenDocument>
>

Thai Burma Border Consortium (TBBC) feeding figure（2008 年 1 月 31 日付）